

「商業資本実存条件としての 商品流通(市場)について」⁽⁴⁾

谷 川 宗 隆

〔四〕「資本の三循環の統一」

目 次

まえがき

問題提起

〔A〕 第三篇における各特殊的循環とそれらの統一

(a) 商品資本の循環形式

(a-1) 部門Ⅰにおける商品資本の循環形式

(a-2) 部門Ⅱにおける商品資本の循環形式

(b) 貨幣資本の循環形式

(b-1) 部門Ⅰにおける貨幣資本の循環形式

(b-2) 部門Ⅱにおける貨幣資本の循環形式

(c) 生産資本の循環形式

(d) 三循環の統一

〔B〕 第三篇第二十章「単純再生産」の第一篇への還元

〔五〕 結 語

ま え が き

我々は別稿⁽¹⁾において次の如く指摘した。『資本論』第二卷第三篇「社会的総資本の再生産と流通」は第二卷総体としてみれば第二篇、「資本の回転」第一篇「資本の姿態変換とその循環」を前提としている。この場合、第一篇、第二篇が如何なる内的論理において第三篇の準備をなしているのかという問題が生じる。この事を明らかにするには、第一篇→第二篇→第三篇という「上向」の論理と共に、逆に、第三篇を第二篇に、第二篇を第一篇に還元する「下向」

の論理を追求する必要があると思われる。更に、かかる還元をして始めて第一巻と第二巻、第二巻と第三巻との連けいが明らかになるのではないだろうか。

然し、以下、かかる大きな課題を全面的にここで問題とするのではない。かかる課題を解明する準備として、まず第三篇第二十章「単純再生産」の第一篇への還元を形式に着目して試みようとするものである。しかも、さしあたりこの小論においては資本の各三循環の統一についてのみ考察する。

問 題 提 起

産業資本の姿態変換とそれらの循環を過程としてみれば、まずそれは三段階に分かたれ、かつそれぞれの段階で異った実存形態において定在する。さしあたり、第一篇、第一章の第一節、第二節、第三節において貨幣資本の循環の第一段階 $G-W \leftarrow \overset{P_m}{A}$ 、第二段階生産資本の機能、第三段階 $W'-G'$ が分析されている。そして産業資本はかかる各段階においてとる特殊的な実存形態を出発点＝帰着点として各特殊的な循環を描く。そして、第一章においては貨幣資本の循環が、第二章においては生産資本の循環が、第三章においては商品資本の循環がそれぞれ分析されている。

然し、もともと、これら各特殊循環形式は産業資本の一特殊的循環形式であり、かくして、現実には三循環は統一として実存する⁽²⁾。さて、かかる三循環の統一はさしあたり、第一章「貨幣資本の循環」においては次のように示される。

$$\begin{array}{c} \text{G-W} \cdots \cdots \text{P} \cdots \cdots \text{W'-G'} \cdot \text{G-W} \cdots \cdots \text{P} \cdots \cdots \text{W'-G'} \cdots \cdots \\ \text{①} \qquad \qquad \qquad \text{②} \qquad \qquad \qquad \text{③} \end{array}$$

確かに貨幣資本の姿態変換とその循環はそれらのうちに生産資本並びに商品資本の姿態変換とそれらの循環の出発点を含む。それ故、三循環の統一は上述の形式において示されており何ら問題はなさそうである。

然し、もしこの形式で三循環の統一を把握するとすれば次の疑問が生じる。すなわち、何故に第一篇、第四章「循環過程の三つの姿」という章がもうけら

れ、かつ、ここで三循環の統一を見直しているのかということである。更に、三循環の統一を貨幣資本の循環形式を基軸に把握すれば、次の不都合が生じる。すなわち、上述の形式は貨幣資本の循環が少くとも二回以上繰り返されることを前提としている。所で、貨幣資本の循環形式は再生産を表示し得ず、一回限りでも終了しうる。⁽³⁾それ故、貨幣資本が繰り返し循環を継続すればという条件が必要である。所で、繰り返し循環が継続するには個別資本のみならず、社会的総資本の再生産をも表示する商品資本の循環を基軸として見直す必要が生じる。

さて、三循環の統一は第一篇第四章において次のように把握されている。

「三循環の統一においてのみ上述の中断の代りに総過程の連続性が現実化されている。社会的総資本はつねにこの連続性を有し、この総資本の過程はつねに三循環の統一を有する」⁽⁴⁾

そこで以下、我々はまず第三篇、第二十章「単純再生産」において三循環が如何に統一として実存しているかをつきとめ、その後、これを第一篇に還元して第一篇における三循環、並びに三循環の統一を考察してみる。

〔A〕 第三篇における各特殊的循環とそれらの統一

さて、第三篇、第二十章単純再生産における各特殊的循環形式を検討するには、まず社会的総資本の再生産＝流通形式を析出する必要がある。この点について我々はすでに別稿において検討し⁽⁵⁾次の形式を引き出した。但し、各特殊生産部門における個別資本、並びに各特殊生産部門を形成する資本群が生産する商品量の使用価値種類、量はさしあたり捨象する。又、個別資本は社会的総資本を形成する一断片として把握されている。更に、すでに検討した⁽⁶⁾如く商品資本を W' als W , W' als Kapitalverhältnis として把握する。

$$\text{I. } 4000C + 1000V + 1000M = 6000$$

$$\text{II. } 2000C + 500V + 500M = 3000$$

註、大文字のC, V, Mは社会的総資本の不变資本, 可変資本, 剰余価値を表わす。個別的資本の資本部分を表示する場合は小文字で表わす。

この範式は次の様に表現出来る。

$$(P_m)W'(6000) = (P_m)W(4000C) + (P_m)W(1000V) + (P_m)W(1000M)$$

$$(L_m)W'(3000) = (L_m)W(2000C) + (L_m)W(500V) + (L_m)W(500M)$$

すれば表式分析により次の再生産=流通形式が得られる。

$$4000 I_C : (P_m)W(4000C) - 4000G \cdot 4000G - (P_m)W(4000)$$

$$1000 I_V : 1000 II_C$$

$$\begin{aligned} & (P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000) \\ & A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ & (L_m)W(1000C) - 1000G \cdot 1000G - (P_m)W(1000) \end{aligned}$$

$$1000 I_M : 1000 II_C$$

$$\begin{aligned} & (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ & (L_m)W(1000C) - 1000G \cdot 1000G - (P_m)W(1000) \end{aligned}$$

$$(1000 I_V + 1000 I_M) = 2000 II_C \text{ で見直せば,}$$

$$\begin{aligned} & (P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000) \\ & A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ & (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ & (L_m)W(2000C) - 2000G \cdot 2000G - (P_m)W(2000) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} 500 II_V & (L_m)W(500V) - 500G \cdot 500G - A(500) \\ & A(500) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500) \end{aligned}$$

$$500 II_M \quad (L_m)W(500M) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500)$$

但し、矢印は貨幣通流の方向、〔G〕は投下貨幣を表わす。

さて、社会的総資本はかかる再生産＝流通形式でもって実現され、かつ質料的＝価値的に見ても填補され再生産をなす。更にかかる形式は各特殊生産部門の資本群、並びに各特殊生産部門内での個別資本に妥当する。⁽⁷⁾

所で、社会的総商品資本を W' als W と把握しその一般的商品流通形式でみれば、社会的総資本の各資本部分は $W_{(C)} - G - W$, $W_{(V)} - G - A$, $W_{(M)} - G - W$ という再生産＝流通形式をとるのであるが、他面、社会的総資本を W' als Kapitalverhältnis で把握すれば、これら流通形式は資本の運動でもある。⁽⁸⁾ それ故、以下、二大部門における資本の各特殊の循環とそれらの二大部門間における相互関連を考察する必要がある。

(a) 商品資本の循環形式

(a-1) 部門Ⅰにおける商品資本の循環形式、
部門Ⅰにおける商品資本を W' als Kapitalverhältnis, W' als W で表わせば

$$(P_m)W' (6000) \left\{ \begin{array}{l} (P_m)W(4000C) \\ + \\ (P_m)W(1000V) \\ + \\ (P_m)W(1000M) \end{array} \right.$$

すなわち、部門Ⅰの商品資本はこれから出発し、これに帰着する。

さて、 $4000 I_C$, $1000 I_V$, $1000 I_M$ の実現をみれば $4000 I_C$ は、再生産＝流通形式

$$(P_m)W(4000C) - 4000G \cdot 4000G - (P_m)W(4000)$$

をとって部門Ⅰ内の相互交換により実現されかつ現物填補される。

$1000 I_V$ は

$$(P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000)$$

$$(L_m)W(1000C) - 1000G \cdot 1000G - (P_m)W(1000)$$

において、 $(P_m)W(1000V)$ に実存する $1000 V$ たる可変資本価値を実現する。他方、 $(P_m)W(1000V)$ は $1000 I_C$ を現物填補する。次に、

$$(P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000)$$

$$A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000)$$

において、 $1000 I_v$ は $A(1000)$ にて現物填補される。商品としての労働力、部門Ⅰの労働者階級はその価値1000を実現する。

かくて、 $(P_m)W(4000C) + (P_m)W(1000V)$ に実存する $40000 I_c$, $1000 I_v$ たる価値が実現され、かつ現物填補されている。今や、 $W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(4000) \\ A(1000) \end{smallmatrix} \right\rangle$ たる生産資本において $4000 I_c$, $1000 I_v$ は実存する。次年度の再生産が行われ、 $(P_m)W'(6000)$ たる年生産物が再生産される。

$1000 I_M$ は

$$\begin{array}{l} (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ (L_m)W(1000C) - 1000G \cdot 1000G - (P_m)W(1000) \end{array}$$

において、 $(P_m)W(1000M)$ に実存する $1000 I_M$ たる可変資本価値を実現する。他方、 $(P_m)W(1000M)$ は $1000 I_c$ を現物填補する。

$$\begin{array}{l} (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ (L_m)W(1000C) - 1000G \cdot 1000G - (P_m)W(1000) \end{array}$$

において、 $1000 I_M$ は $(L_m)W(1000)$ によって現物填補される。他方、 $(L_m)W(1000C)$ に実存する $1000 I_c$ が実現される。

$$\begin{array}{l} A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ (L_m)W(1000C) - 1000G \cdot 1000G - (P_m)W(1000) \end{array}$$

において、商品としての労働力(1000)に実存する価値1000は $(L_m)W(1000)$ によって現物填補され、かくて労働力が再生産される。他方、 $(L_m)W(1000C)$ に実存する $1000 I_c$ の不変資本価値が実現される。

かくて、部門Ⅰにおける商品資本の循環並びに部門Ⅱとの相互関連は次のようになる。

$$\begin{array}{l} (P_m)W'(6000) - 6000G \cdot \left. \begin{array}{l} 5000G - W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(4000) \\ A(1000) \end{smallmatrix} \right\rangle \cdots \cdots P \\ 1000G - (L_m)W(1000) \end{array} \right\} \\ A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ (L_m)W(2000C) - 2000G \cdot 2000G - (P_m)W(2000) \end{array}$$

(a—2) 部門Ⅱにおける商品資本の循環形式

部門Ⅱにおける $(L_m)W'(3000)$ は、

$$(L_m)W'(3000) \left\{ \begin{array}{l} (L_m)W(2000C) \\ + \\ (L_m)W(500V) \\ + \\ (L_m)W(500M) \end{array} \right.$$

から出発し、これに帰着する。

2000Ⅱ_Cは

$$\begin{array}{l} (L_m)W(2000C) - 2000G \cdot 2000G - (P_m)W(2000) \\ A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \end{array}$$

において $(L_m)W(2000C)$ に実存する2000Ⅱ_Cを実現し、他方、 $A(1000)$ 、 $1000I_M$ を $(L_m)W(2000)$ によって現物填補する。

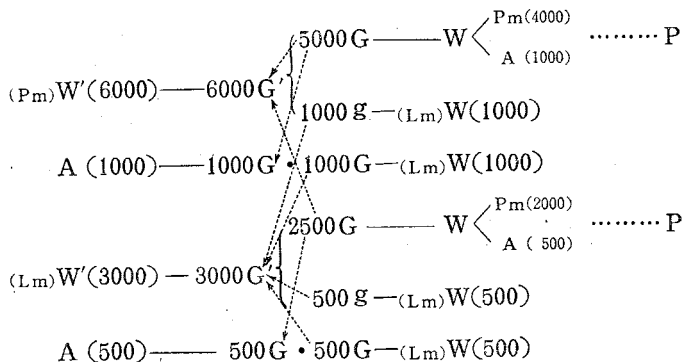
$$\begin{array}{l} (L_m)W(2000C) - 2000G \cdot 2000G - (P_m)W(2000) \\ (P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000) \\ (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \end{array}$$

において、 $(L_m)W(2000C)$ に実存する2000Ⅱ_Cが $(P_m)W(2000)$ によって現物填補される。他方、 $(P_m)W(1000V)$ 、 $(P_m)W(1000M)$ に実存する $1000I_V$ 、 $1000I_M$ たる可変資本価値、剰余価値が実現される。

500Ⅱ_V,

$$\begin{array}{l} (L_m)W(500V) - 500G \cdot 500G - A(500) \\ A(500) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500) \end{array}$$

において、 $(L_m)W(500V)$ に実存する500Ⅱ_Vが実現される。他方、 $A(500)$ が $(L_m)W(500)$ によって現物填補され、かくて労働力が再生産される。



但し、兩部門の商品資本の循環には、

$$A(1000) \rightarrow 1000G \cdot 1000G \rightarrow (L_m)W(1000),$$

$$A(500) \rightarrow 500G \cdot 500G \rightarrow (L_m)W(500),$$

たる労働力の再生産＝流通が不可欠の環として組み込まれている点、看過し得ない。かくて、賃労働と資本の関係、つまり資本関係も再生産される。

(b) 貨幣資本の循環形式

貨幣資本の循環は部門Ⅰにおいては5000Gから、部門Ⅱにおいては2500Gからそれぞれ出発し、部門Ⅰにおいては6000G'に、部門Ⅱにおいては3000G'にそれぞれ帰着する。

〔b—1〕 部門Ⅰにおける貨幣資本の循環、

部門Ⅰにおける5000Gは貨幣資本として投下され、貨幣資本の第一段G—W < $\frac{P_m}{A}$ を遂行する。そのためには労働市場においてA(1000)、生産手段として機能しうる商品 (P_m)W(4000C)が、市場において定在しさえすればよい。かくて、次の流通形式において、第一段階が遂行される。

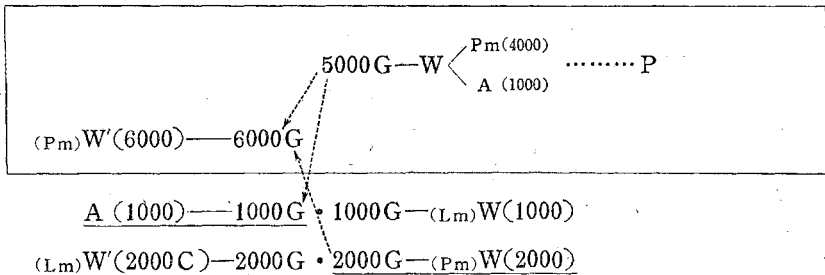
$$\begin{array}{l} (P_m)W(4000C) \rightarrow 4000G \cdot \left\{ \begin{array}{l} 4000G \rightarrow (P_m)W(4000) \\ 1000G \rightarrow A(1000) \end{array} \right. \\ (P_m)W(1000V) \rightarrow 1000G \cdot \left\{ \begin{array}{l} 1000G \rightarrow (L_m)W(1000) \\ 500G \rightarrow (L_m)W(500) \end{array} \right. \\ A(1000) \rightarrow 1000G \cdot \left\{ \begin{array}{l} 1000G \rightarrow (L_m)W(1000) \\ 500G \rightarrow (L_m)W(500) \end{array} \right. \\ (P_m)W(4000C) \rightarrow 4000G \cdot \left\{ \begin{array}{l} 4000G \rightarrow (P_m)W(4000) \\ 1000G \rightarrow A(1000) \end{array} \right. \end{array}$$

貨幣資本 5000G は $W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(4000) \\ A(1000) \end{smallmatrix} \right\rangle$ なる生産資本の実存形態において実存する。

$W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(4000) \\ A(1000) \end{smallmatrix} \right\rangle$ は P の機能の結果 $(P_m)W'(6000)$ に転化する。 $(P_m)W'(6000)$ は次の再生産＝流通形式において 6000G に転化する。

$$(P_m)W'(6000) \left\{ \begin{array}{l} (P_m)W(4000C) - 4000G \cdot 4000G - (P_m)W(4000) \\ + \\ (P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000) \\ + \\ (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ (P_m)W(4000C) - 4000G \cdot 4000G - (P_m)W(4000) \\ (L_m)W(2000C) - 2000G \cdot 2000G - (P_m)W(2000) \end{array} \right.$$

$(P_m)W'(6000)$ に実存する 4000 I_C, 1000 I_V, 1000 I_M が実現され $(P_m)W(6000)$ は 6000G たる貨幣資本に転化する。かくて、貨幣資本の循環と二大部門間の関連は次のように表わされる。



(b—2) 部門Ⅱにおける貨幣資本の循環,

部門Ⅱにおける 2500G は貨幣資本として投下され、次の再生産＝流通形式において、その第一段階 $G - W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m \\ A \end{smallmatrix} \right\rangle$ を遂行する。

$$\begin{array}{l} (L_m)W(2000C) - 2000G \cdot 2000G - (P_m)W(2000) \\ (L_m)W(500V) - 500G \cdot 500G - A(500) \\ (P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000) \\ (P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000) \\ A(500) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500) \end{array}$$

2500Gは $W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(2000) \\ A(1000) \end{smallmatrix} \right\rangle$ たる生産資本の実存形態で実存する。 $W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(2000) \\ A(1000) \end{smallmatrix} \right\rangle$ はPの機能の結果 $(L_m)W'(3000)$ に転化する。

$$(L_m)W'(3000) \left\{ \begin{array}{l} (L_m)W(2000C) \\ + \\ (L_m)W(500V) \\ + \\ (L_m)W(500M) \end{array} \right.$$

は次の再生産＝流通形式において実現する。

$$(L_m)W(2000C) - 2000G \cdot 2000G - (P_m)W(2000)$$

$$A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000)$$

$$(P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000)$$

$$(L_m)W(500V) - 500G \cdot 500G - A(500)$$

$$A(500) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500)$$

$$(L_m)W(500M) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500)$$

$$(L_m)W(500M) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500)$$

$(L_m)W'(3000)$ に実存する 2000Ⅱ_C, 500Ⅱ_V, 500Ⅱ_Mが実現され、かくて、 $(L_m)W'(3000)$ は 3000G' たる貨幣資本に転化する。部門Ⅱにおける貨幣資本の循環と部門間の連関は次のようになる。

$$(P_m)W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000)$$

$$A(1000) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000)$$

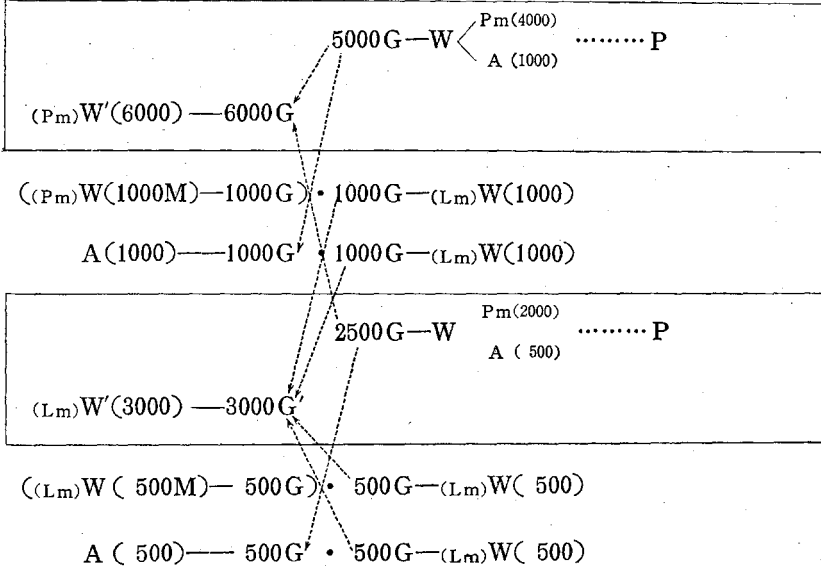
$$(P_m)W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - (L_m)W(1000)$$

$(L_m)W'(3000) - 3000G \cdot$	$2500G - W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(2000) \\ A(500) \end{smallmatrix} \right\rangle \dots\dots\dots P$
-------------------------------	--

$$A(500) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500)$$

$$(L_m)W(500M) - 500G \cdot 500G - (L_m)W(500)$$

かくして、部門Ⅰ、Ⅱにおける貨幣資本の循環、並びに両部門間の相互関連は次のようになる。但し、直線の枠内は貨幣資本の循環、



ここで注意せねばならぬ点は次のようである。再生産過程における一特殊的循環としての貨幣資本の循環にとっては、これらⅠ、Ⅱの貨幣資本の循環外にある剰余価値の流通の第二段階

$$(P_m)W(1000M) \text{ — } 1000 \cdot \underline{1000G \text{ — } (L_m)W(1000)}$$

$$(L_m)W(500M) \text{ — } 500G \cdot \underline{500G \text{ — } (L_m)W(500)}$$

並びに労働力の再生産＝流通

$$A(1000) \text{ — } 1000G \cdot 1000G \text{ — } (L_m)W(1000)$$

$$A(500) \text{ — } 500G \cdot 500G \text{ — } (L_m)W(500)$$

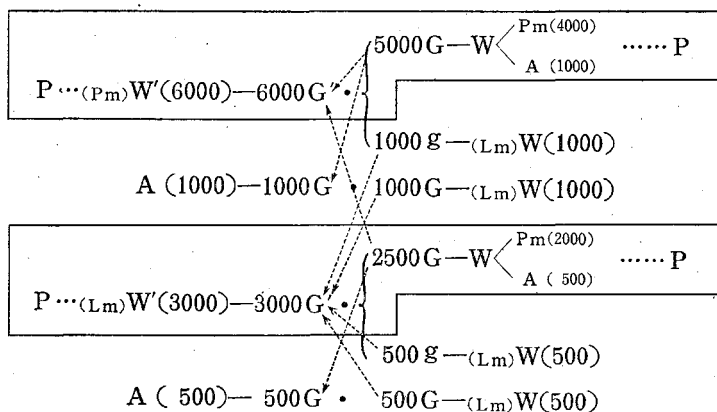
が不可欠の環として前提されている事である。然し、これらの環は貨幣資本の循環形式には組み入れられない。又剰余価値の流通と資本価値の流通は分離し得ない。

(c) 生産資本の循環形式

部門Ⅰにおける生産資本は $5000G = W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(4000) \\ A(1000) \end{smallmatrix} \right\rangle = P$ から出発しこれに帰着する。出発点Pの転化形態は $(P_m)W'(6000)$ である。従って、生産資本の流通

$$\text{部面は } (P_m)W'(6000) \left\{ \begin{array}{l} (P_m)W(4000C) \\ + \\ (P_m)W(1000V) \\ + \\ (P_m)W(1000M) \end{array} \right. \text{ から出発し, } 4000I_C, 1000I_V, 1000I_M$$

なる資本部分、剰余価値が実現され、かつ現物填補されねばならぬ。所で、生産資本の流通部面は W' から出発するが故に、商品資本の循環の流通部面と同様の再生産＝流通形式をとる。このことは部門Ⅱにおける生産資本 $2500G = W \left\langle \begin{smallmatrix} P_m(2000) \\ A(500) \end{smallmatrix} \right\rangle = P$ にも同様にあてはまる。とは云え、生産資本の循環は価値増殖すべき資本価値から出発しこれに帰着する。それ故、貨幣資本の循環と異なり、この形式においては資本価値の流通と剰余価値の流通に分離する。又、価値増殖すべき資本価値から出発し、かつ、流通部面は再生産された資本価値の担い手たる $W(C+V)$ から出発するが故に、生産資本の循環は資本価値の再生産を表示する。従って又、労働力の再生産＝流通形式をも包括する。とは云え、価値増殖すべき資本価値から出発し、これに帰着するが故に、剰余価値の流通の第二段階はこの循環外にある。かくて、部門Ⅰ、Ⅱにおける生産資本の循環形式と部門間の相互関連は次のようになる。



但し再生産過程における一特殊的循環としての生産資本の循環にとつては、

$$(P_m)W(1000M) - 1000G \cdot \frac{1000G - (L_m)W(1000)}{A(1000)}$$

$$(L_m)W(500M) - 500G \cdot \frac{500G - (L_m)W(500)}{A(500)}$$

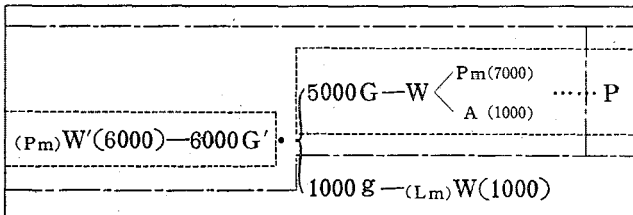
$$A(1000) - 1000G \cdot \frac{1000G - (L_m)W(1000)}{A(1000)}$$

$$A(500) - 500G \cdot \frac{500G - (L_m)W(500)}{A(500)}$$

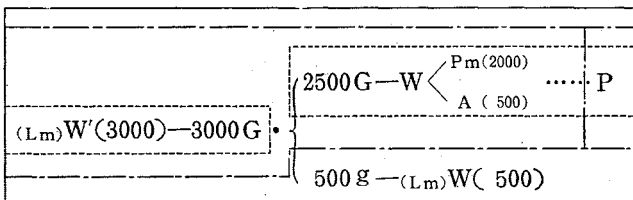
が不可欠の環をなしている。とは云え、生産資本の循環には剰余価値の流通の第二段階は含まれない。

(d) 三循環の統一

以上の考察で明らかとなったように、社会的総資本の再生産過程における各特殊的循環は労働力の再生産＝流通のみならず、剰余価値の再生産＝流通をも包括する商品資本の循環形式を基軸にして始めて、三循環は統一において実存しうる。換言すれば、貨幣資本の循環においては資本価値と剰余価値の流通は分離し得ず、生産資本の循環においては、資本価値の流通と剰余価値の流通は分離し得てもその第二段階はこの循環外にある。かくて、三循環の統一は商品資本の循環を基軸にして始めて次のように示し得る。



$$A(1000) - 1000G \cdot \frac{1000G - (L_m)W(1000)}{A(1000)}$$



$$A(500) - 500G \cdot \frac{500G - (L_m)W(500)}{A(500)}$$

註 ——— 内は商品資本の循環
 内は貨幣資本の循環
 - - - - 内は生産資本の循環

商品資本は部門Ⅰ， $(P_m)W'$ (6000)，部門Ⅱ， $(L_m)W'$ (3000)から出発し，これに帰着する。

貨幣資本は部門Ⅰ，5000 G，部門Ⅱ，2500 Gたる貨幣資本，Geld Kapitalから出発し，部門Ⅰ，6000 G'，部門Ⅱ，3000 G'たる Geld Kapital に帰着する。

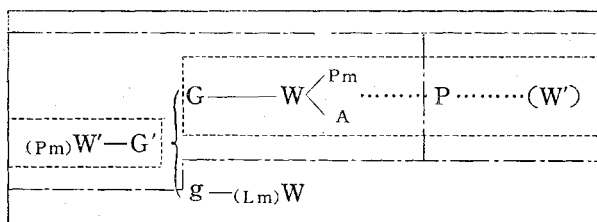
生産資本は $5000 G = W \angle \frac{P_m(4000)}{A(1000)} = P$ ， $2500 G = W \angle \frac{P_m(2000)}{A(500)} = P$ から出発し，これに帰着する。

従って，社会的総資本の再生産過程においては，商品資本はつねに W' als W ， W' als Kapitalverhältnis たる Warenkapital として，貨幣資本は Geld kapital から出発し Geld Kapital に帰着する Geld Kapital として，生産的資本はつねに Produktive Kapital として実存する。

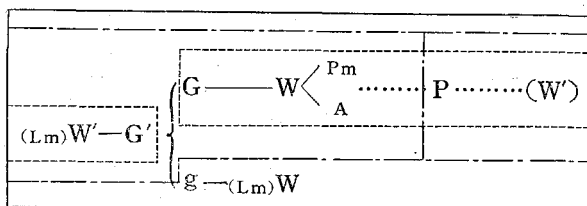
今，単純再生産が前提となっているのだから，上述の形式は年々同じ規模で繰り返される。かかる再生産過程において始めて，産業資本の総循環は，商品資本の循環，貨幣資本の循環，生産資本の循環という三つの独自の循環を含みかつ，商品資本，貨幣資本，生産資本という実存形態において統一 (Einheit) において実存する。

〔B〕 第三篇第二十章「単純再生産」の第一篇への還元

さて，以上考察した生産手段生産部門，生活手段生産部門における社会的総資本の総循環の価値量を捨象し，形式のみに還元すれば次の形式を得る。

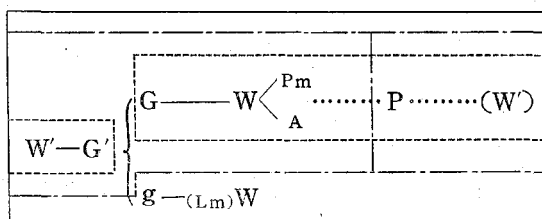


$A \xrightarrow{\quad} G \xrightarrow{\quad} (L_m)W$



$$A \text{ --- } G \text{ --- } (L_m)W$$

従って、社会的総資本の総循環＝三循環形式の統一は、次の様になる。



$$A \text{ --- } G \text{ --- } (L_m)W$$

今、この形式によって、第一篇をみれば、第一篇、第四章「循環過程の三つの姿」はこの形式の分析が主題となっている。第一篇第一章「貨幣資本の循環」はこの形式を前提として、第一章第一節、第二節、第三節において、それぞれ貨幣資本の循環の第一段階、第二段階、第三段階における資本の実存形態が先取りされて分析されている。従って、第四章は、第一章、第二章、第三章各章において分析された各特殊循環形式を、商品資本の循環形式を基軸に再生産過程における三循環形式の実存形態として、その統一において見直していると云える。

所で商品資本の循環は W' als W から出発するのではなく、 W' als Kapitalverhältnis から出発する。然るに、かかる W' は、貨幣資本においてはその第三段階、生産資本においてはその第二段階において始めて定在する。従って、商品資本の循環の分析には、貨幣資本・生産資本の循環の分析が前提となる。更に別稿において考察した如く、貨幣資本の循環の分析には、 W' als W たる商品資本が描く一般的商品流通と商品としての労働力の流通 $A-G-W$ が

前提となっている。かつ、貨幣資本の循環と一般的商品流通との関連は次の形式で示された。

$$(P_m)W-G-W$$

$$A-G-W$$

$$G-W \leftarrow \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \dots\dots P \dots\dots W'-G'$$

$$W-G-W$$

さて、我々が〔A〕—(b)において検討した貨幣資本の循環形式と再生産＝流通形式との関連を形式においてみればこの形式と同一である。従って、第一篇、第一章、第二章、第三章、第四章、各章において前提とされている一般的商品流通とは我々が析出した再生産＝流通形式に外ならない。すれば、第二巻の出発点としての $W' \text{ als } W$ たる商品資本は部門Ⅰ、Ⅱの総商品資本に外ならない。

〔五〕 〔結 語〕

第二巻の出発点としての商品が $W' \text{ als } W$ たる商品資本であり、かつ部門Ⅰ、Ⅱにおける社会的総資本の商品資本であるとすれば、第一篇、第一章、第二章、第三章、第四章の主題はまず商品資本の出発点＝帰着点たる $W' \text{ als } Kapitalverhältnis$ を析出することにある。 $W' \text{ als } Kapitalverhältnis$ を出発点＝帰着点とする商品資本の循環は、資本価値の再生産＝流通と剰余価値の再生産＝流通とに分離し、しかも剰余価値の流通総体を含む。それ故、商品資本の循環は個別資本のみならず社会的総資本の再生産を表示する。かくて、商品資本の循環を基軸にして、三循環がつねに統一において実存しているということを分析する根拠は、社会的総資本の再生産にとっての不可欠な条件を分析していることを意味する。

「過程が自らを表示する最も手近な形態は、新段階への資本の移行は他段階からの資本の退去によって条件づけられているというような、諸段階の継起の形態である。だからまた、特殊的循環はいつでも、資本の機能諸形態の一つを

出発点および帰着点とする。他面、総過程は事実上、過程の連続性が以って自らを表現する相異なる諸形態たる三つの循環の統一である。総循環は、資本の各機能形態にとっては、その独自の循環として自らを表示するのであり、しかも、これらの循環の各々は総過程の連続性を条件づける。一方の機能形態の循環は他方のそれを条件づける。総生産過程が同時に再生産過程であり、従ってその各契機の循環であるということは、総生産過程にとっての、殊に社会的資本⁽¹¹⁾⁽¹²⁾にとっての、必然的な一条件である」

所で、貨幣資本、生産資本、商品資本の循環形式の分析には一般的商品流通、すなわち我々が析出した再生産＝流通形式を前提とする。各三循環を一般的商品流通との関連でみれば、貨幣資本の循環においては資本価値と剰余価値の流通が分離すらし得ず、生産資本の循環においては資本価値の再生産＝流通と剰余価値の再生産＝流通は分離しうが、その第二段階 $g-w$ はこの循環に含み得ない。かくて、商品資本の循環において始めて資本価値の再生産＝流通、並びに剰余価値の再生産＝流通は分離し得、かつ剰余価値の全流通を含む。従って、商品資本の循環において始めて一般的商品流通、すなわち再生産＝流通形式は包括される。とは云え、商品資本は W' から出発しこれに帰着するのであるが、 $W' = W'$ als Kapitalverhältnis は貨幣資本、生産資本の循環の生産物であり、理論分析にとってはまず貨幣資本の循環から始めざるを得ない。又、産業資本の最初（あるいは最後の）形態は貨幣資本であるが故に貨幣資本の分析から始めざるを得ない。すれば、第二巻は一方では第三篇の部門 I, II の総商品資本が描く一般的商品流通、他方では部門 I, II における労働者階級の実存とそれが描く $A-G-W$ を前提として貨幣資本の分析から出発する。

さて、通説とは異なり、以上の如く商品資本の循環を基軸にして三循環の統一を把握すれば、第二巻、第一篇、第五章流通時間、第六章流通費用はかかる三循環の統一を前提としていると云える。

産業資本の流過程は個別資本、社会的総資本の再生産過程の一段階をな

す。

純粹流通費用は同一価値の姿態変換のためにのみ投ぜられる費用であり、従って、空費であるとは云え、産業資本がその再生産過程を円滑に進行するには、それを欠くことは出来ぬ。なかなずく、商品資本の流通部面における第一の姿態換 $W' - G'$ は「商品の命がけの飛躍である」⁽¹³⁾だけになお更である。

保管費用、運送費用は、正常な再生産を前提とすれば、社会的富の一存立条件であるが故に、資本の再生産過程を前提とすること明らかである。

今、第二巻、第二篇「資本の回転」をみれば、我々の如く三循環の統一を把握することと一見矛盾しそうである。然し、資本の回転は資本の姿態変換とそれの循環を前提とする。更に、資本の回転は年々の再生産を基準として始めて分析される。従って、もし三循環の統一を貨幣資本の循環を基軸として把握すれば、第三篇との連けいは把握不可能となる。個別資本を社会的総資本の一断片として還元し、年々の総再生産を前提するとすれば、商品資本の循環を基軸にした三循環の統一を前提とせざるを得ない。

かくて、第三巻、第四篇「商人資本」において前提とされている第二部は、単に第二部、第三篇のみならず、第二部総体が前提とされていると云いうる。

今、我々の主題—商業資本は如何なる意味で商品流通（市場）を実存条件とするのか—に限定して第十六章「商品取扱資本」を見てみる。

(A) 「商品資本の運動は第二部で分析されている。社会の総資本を考察すれば、その一部分は——つねに別の〔—andren—谷川〕諸要素から構成され、また量的にも変動するとは云え——つねに、貨幣に移行するために商品として市場にあり、他の一部分は、商品に移行するために貨幣として市場にある。それはつねに、この移行運動、この形式的姿態変換運動をしている。流通過程にある資本のこの機能が一般的に一特殊的資本の特殊機能として自立化され、分業によって一特殊的資本家部類にわり当てられた一機能として固定化する⁽¹⁴⁾かぎり、商品資本は商品取扱資本または商業資本となる」

(B) 「すでに見たように、商品資本としての資本の定在、および、資本が流

通部面内・市場・で商品資本として通過する姿態変換——購買および販売に帰着する姿態変換、商品資本の貨幣資本への転形および貨幣資本の商品資本への転形——は、産業資本の再生産過程したがって総生産過程の一段階をなすが、それと同時に、それ〔産業資本〕は、流通資本としてのこうした機能においては、生産資本としてのそれ自身から区別される。流通資本と生産資本とは、同一資本の特殊化され、区別された二つの実存形態である。社会的総資本の一部分は、たえず、この流通資本としての実存形態で市場にあり、上の姿態変換の過程にある。といっても、各個の資本にとっては、商品資本としての定在および商品資本としての姿態変換は、その生産過程の連続性のたえず消滅し、たえず更新される一通過点、一通過段階をなすにすぎず、したがって、市場にある商品資本の諸成分はたえず変動する。——けれど、それらの成分はたえず商品市場から引上げられ、また絶えず生産過程の新生産物として商品市場に返還されるから——⁽¹⁵⁾ のではあるが]

A文は社会的総資本が一般的商品流通の立場で把握されている。これを我々が析出した社会的総資本の再生産＝流通形式においてみれば、次のようになる。但し、さしあたり商業資本は下線の部分の機能に外ならないが故にG—W—Gと把握されている。⁽¹⁶⁾

4000 I c

$$\frac{\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(P_m)} W(4000C) - 4000G \cdot 4000G - \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(P_m)} W(4000)}{\quad}$$

$$(1000V + 1000M) I = 2000 I_C$$

$$\frac{\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (b_{ij})_{(Pm)} W(1000V) - 1000G \cdot 1000G - A(1000)}{\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (d_{ij})_{(Pm)} W(1000M) - 1000G \cdot 1000G - \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (\beta a_{ij})_{(Pm)} W(1000)}$$

500 II v

$$\begin{array}{l}
 \frac{\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (b_{ij}) (L_m) W(500 V) - 500 G \cdot 500 G - A(500)}{\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (d_{ij}) (L_m) W(500 M) - 500 G \cdot 500 G - \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (d_{ij}) (L_m) W(500)} \\
 A(500) - 500 G \cdot 500 G - \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (b_{ij}) (L_m) W(500)
 \end{array}$$

B文はA文を社会的総資本の姿態変換とその循環において見直している。これを形式で示せば次のようになる。但し、簡単化のため使用価値の種類、量は捨象する。

$$\begin{array}{l}
 (P_m) W'(6000) - 6000 G \cdot \left\{ \begin{array}{l} 4000 G - (P_m) W(4000) \\ 1000 G - A(1000) \\ 1000 g - (L_m) W(1000) \end{array} \right. < \dots P \\
 A(1000) - 1000 G \cdot \left\{ \begin{array}{l} 1000 G - (P_m) W(1000) \\ 2000 G - (P_m) W(2000) \end{array} \right. < \dots P \\
 (L_m) W'(3000) - 3000 G \cdot \left\{ \begin{array}{l} 500 G - A(500) \\ 500 g - (L_m) W(500) \end{array} \right. \\
 A(500) - 500 G \cdot 500 G - (L_m) W(500)
 \end{array}$$

さて、社会的総資本を社会的総資本の一断片としての個別資本との関連でみてる。以下、簡単化のため、 $(P_m)W_1$ は部門Ⅰの不変資本部分を現物填補するとする。すなわち生産手段生産部門における一特殊生産手段部門〔1〕をみる。この部門における各特殊個別資本は、 $(P_m)W_1$ にて代表されるものとする。

$\sum_{j=1}^n (a_{1j}) (P_m) W$ の価値量を600とする。更に、 $a_{11}, a_{12}, a_{13}, \dots, a_{1n}$ の価値量を $x_{11}, x_{12}, x_{13}, \dots, x_{1n}$ とする。すなわち $\sum_{j=1}^n (x_{1j}) = 600$

さて、 $\sum_{j=1}^n (a_{1j}) (P_m) W(600)$ を個別資本の立場から W' als Kapitalverhältnis と

$$\frac{\sum_{i=1}^n (\beta a_{ij})_{(Lm)} W(100C) - 100G \cdot 100G - \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W(100)}{}$$

従って、今、 $\sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W(600)$ は、商業資本に販売されたとする。個別資本の立場からすれば、 $\sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W(600)$ は実現し、上述の再生産＝流通形式をとって現物填補し、再生産をしよう。

すなわち、

$$\sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W'(600C) - 600G' \cdot \begin{cases} 400G - \sum_{i=1}^n (a_{i1})_{(Pm)} W(400) \\ 100G - \frac{\sum_{i=1}^n (a_{i1})_{(Pm)} W(400)}{A(100)} < \dots P \\ 100g - \sum_{i=1}^n (\beta a_{i1})_{(Lm)} W(100) \end{cases}$$

然し、他方、商業資本のWとして実存する $\sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W(600C)$ はまだ市場に定在する。

換言すれば、これは相変らず次の再生産＝流通形式をとって実現されねばならぬ。

$$\begin{aligned} & \frac{\sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W(600C) - 600G}{(Pm)W(X_{11})c_1 - (X_{11})G - (a_{11})_{(Pm)}W(X_{11})} \\ & (Pm)W(X_{12})c_2 - (X_{11})G - (a_{12})_{(Pm)}W(X_{12}) \\ & \dots\dots\dots \\ & (Pm)W(X_{1n})c_n - (X_{1n})G - (a_{1n})_{(Pm)}W(X_{1n}) \end{aligned}$$

総括すれば、

$$\begin{aligned} & \frac{\sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W'(600C) - 600G'}{\begin{cases} 400G - \sum_{i=1}^n (a_{i1})_{(Pm)} W(400) \\ 100G - \frac{\sum_{i=1}^n (a_{i1})_{(Pm)} W(400)}{A(100)} < \dots P \\ 100g - \sum_{i=1}^n (\beta a_{i1})_{(Lm)} W(100) \end{cases}} \\ & \frac{600G - \sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W(600C) - 600G}{\sum_{i=1}^n (Pm)W(600c_i) - 600G \cdot 600G - \sum_{j=1}^n (a_{ij})_{(Pm)} W(600)} \end{aligned}$$

「だから商品取扱資本は、まったく、貨幣への転形過程を通過すべき、市場で商品資本として機能を果すべき、生産者の商品資本以外の何ものでもなく、ただこの機能がいまや、生産者の附随的操作としてでなく、資本家の特殊部類たる商品取扱業者の専門的操作として現象し、特殊的投資の事業として自立化される、というだけのことである。」⁽¹⁸⁾

かくて、商業資本が商品流通（市場）をその実存条件とする意味は、 $G-W-G$ における W の再生産＝流通を実存条件とすることを意味する。すれば、商業資本の分析にとって、貨幣資本の循環を前提とし得ない。

なるほど第三巻は「全体として考察された資本の運動過程から生ずる具体的諸形態を発見して叙述することである」⁽¹⁹⁾

従って、商業資本の分析にとって対象となる形態は「社会の表面で種々の資本の相互的行動たる競争中および生産当事者たち自身の普通の意識中に現われる形態」⁽²⁰⁾ である。然し、

「範疇は、その本質において、生産関係そのものであるが、本質は、これを隠蔽する特定の形態のもとにのみ現われてくる。抽象的な範疇が具体的なものにすすみ、新たな契機においてとらえられ多くの規定をふくむにつれて、本質とその現象形態とは、甚だしく乖離し物神化がひどくなる。本質と現象形態とは対立関係に立つのだが、もと現象形態は本質の現象形態なのだから統一関係にある」⁽²¹⁾、ここに、第三巻、第四篇において第二部総体が前提とされる根拠がある。

註(1) 拙稿、「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)

「富大経済論集」13—3, 1967年10月, 以下「商品流通について」(1)と略称する。

(2) 「どの形態、どの段階にある資本の再生産も連続的であるのは、これらの形態の姿態変換や三段階を通しての継起的経過が連続的であるのと同様である。だからここでは、総循環はその三形態の現実的統一である」*Das Kapital*—Ⅱ, Dietz Verlag Berlin 1953. S.96. 訳, 長谷部氏訳, 「資本論」第二部全, 青木書店版, 以下訳書と略称する。

(3) 拙稿, 「商品流通について」(2)「富大経済論集」13—4, 1968年1月, 参照。

(4) *Das Kapital*—Ⅱ, S.100 訳書, 第二部138頁

- (5) 拙稿「商品流通について」(3)「富大経済論集」14—Ⅰ, 1968 年4月, 参照
- (6) 「商品流通について」(1), (2), (3)参照
- (7) 「商品流通について」(3), 〔三〕の〔B〕個別資本と社会的総資本の再生産=流通形式」においてこの点を論証した。
- (8) 「商品流通について」(1), (2), (3)参照
- (9) 「商品流通について」(2), 〔二〕「資本の循環と一般的商品流通形式」参照
- (10) 「商品流通について」(1)参照
- (11) Das Kapital—Ⅰ, S. 99 訳書, 137頁
- (12) 第二巻, 第三篇において社会的総資本の循環形式を考察しようとする試みは高須賀義博氏が, 「再生産表式分析」(新評論社版)においてなされている。
- (13) Das Kapital—Ⅰ. S. 111. 訳第一部(上) 223頁
- (14) Das Kapital—Ⅲ. S. 297. 訳第三部(上) 385~6頁
- (15) Das Kapital—Ⅲ. S. 298. 訳第三部(上) 386頁
- (16) 拙稿「商品流通」(3)参照
- (17) 同 上
- (18) Das Kapital—Ⅲ. S. 300~301. 訳第三部(上) 389~390頁。
- (19) Das Kapital—Ⅲ. S. 47. 訳第三部(上) 73頁。
- (20) Das Kapital—Ⅲ. S. 47. 訳第三部(上) 73~4 頁。
- (21) 安部隆一著「流通諸費用の経済学的研究」4 頁。